白鷗小

ねばり強く考えを深め合う子の育成

～よく聞き、分かりやすく話す指導を通して～

（３年計画の２年次）

校　長　　寺　井　　健　司

１　研究主題について

(1) 学校教育目標具現化のために

本校では、「生き生きした子」を教育目標に掲げ、教育活動全体を通して、その具現化のための取組を続けている。教育目標を具現化するためには、県教育委員会の学校教育指導の方針と重点にあるように、「一人一人の子どもが、各教科及び総合的な学習の時間等において、主体的・対話的で深い学びを通して確かな学力を身に付けることができるよう、言語活動の充実を図りながら、一人一人の能力・適性に応じた指導と学習習慣の育成に努める」ことが大切であると考える。また自分の考えをもって伝え合える場を設定し、話合いのさせ方や支援・手立ての在り方を工夫することは、生き生きと自分の考えを表現することにつながり本校で目指す児童像の実現に迫ることができると考える。

(2) 児童の実態から

昨年度は、授業前に「話し方・聞き方名人の歌」を日常的に唱和させることで、気を付けるべき事項を意識できるようになり、聞き方・話し方が向上してきた。話し方では、理由付け・意見の付け足しができるようになってきた。また、教師からの問い返しを継続して行ったり、反応を促したりすることで、子ども同士でも問い返しや反応ができるようになってきている。

しかし、話合いの場において、友達の話を最後まで聞いていなかったり、話している最中に相手の話を遮ってしまったりする様子が見られ、話合いが深まらないことなどが課題としてあげられた。さらに、アンケートの結果から、分からないとすぐにあきらめてしまったり、相手の理解が不十分でも説明を根気強く続けることができなかったりする傾向が見られた。

そこで、今年度は、研究主題に新たに「ねばり強く」の文言を加えることとした。「よく聞き、分かりやすく話す」指導の工夫を継続することで、最後までしっかり聞くことや諦めずに考えること、相手が分かるまで説明したり分かりやすく話したりできるのではないかと考える。

(3) 「ねばり強く考えを深め合う」とは

「何を理解しているか、何ができるか」という生きて働く「知識・技能」を習得させ、「理解していること・できることをどう使うか」という未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」を育成していくことが深い学びにつながると考える。「自分一人で分かったつもりになっていても、他者に説明してみたらうまく言えなかった。」「他者の話を聞いたら自分の気付かなかったことが分かった。」などの対話的活動を通して学びが深まると考える。また、学習内容を理解し記憶することも重要だが、それを通して新たな事象に対する見方を形成し、「自分なりの見方・考え方」ができるようになることも深い学びととらえる。そして、このような取組を日常の授業の中で継続して行うことが、確かな学力の育成につながると考える。これらから、本校では「ねばり強く考えを深め合う」ことを、次のようにとらえる。

ア　お互いに納得できるまで話し合い、学びを深めること。
イ　お互いに気付かなかった新しい視点を獲得できるまで、学びを深めること。
ウ　お互いに新たな事象に対してよりよい考え方ができるまで、学びを深めること。

２　研究のねらい

ねばり強く考えを深め合う子を育成するために、発問や学びに向かう力を向上させる手立て、話合い活動の工夫、聞き方・話し方の日常的な指導はどうあればよいか、算数科の授業実践を通して明らかにする。

３　研究仮説

よく聞き、分かりやすく話す指導を工夫することにより、ねばり強く考えを深め合う子を育成することができる。

４　研究内容

(1) 発問（主発問・補助発問）の工夫

ア　教師からの問い返す内容の吟味とその効果等について。
イ　発問の仕方、内容、タイミング等の工夫。

(2) 学びに向かう力を向上させる手立ての工夫

子どもが見通しをもって主体的に取り組めるように、教材・環境の工夫をする。

ア　課題の吟味、問題提示の仕方や場面想起のさせ方の工夫。
イ　「やりたい、できそう！」と問題解決の見通しをもたせる場の工夫。
ウ　振り返りを生かす工夫。

(3) 話合い活動の工夫
ア　話し合う観点を与える等、思考を深める工夫。
イ　順序立てて話す指導の継続。

５　研究の経過

(1) 研究の仮説に基づく授業研究

月	日	学年・授業者・題材名
９	１５	第１回授業研究（３学年）　題材名　「あまりのあるわり算」 授業者　高橋　亜佑　　指導助言　本校教頭　三津谷　喜美典
１１	１０	第２回授業研究（５学年）　題材名　「面積」 授業者　相馬　由紀子　　指導助言　本校教頭　三津谷　喜美典

(2) 一般研修

月	日	内容・講師・概要等
5	19	支援を要する子に関する情報交換（心の架け橋）　担当　生徒指導部
	24	一人一台端末活用に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石井　一二三氏
6	16	ＡＥＤ講習会 講師　八戸東消防署鮫分署　署員
	30	絵の描き方について 講師　宇部　好子氏
8	25	県学習状況調査採点
9	15	プログラミング教育に関する研修 講師　八戸市総合教育センター　主任指導主事　石　井一二三氏

６　研究の成果

(1) ねらいに沿った問い返しを行うことにより、児童の思考を揺さぶり問いをもたせたり、話合いを焦点化させ根拠を明らかにして考えを深めたりすることができた。
(2) 課題の提示の工夫により、主体的に学びに向かうことができた。そのままの教科書の問題ではなく、必要に応じて「数字を変える」「出題の順序を変える」「多様な考えが期待できる課題提示」など、少しの工夫をすることは、児童が意欲をもって学びに向かう上で有効であった。
(3) 既習内容の確認をしたり、視覚的に具体的なイメージをもたせたりするなど、見通しのもたせ方を工夫することは、児童の思考を促し、主体的に課題を解決しようとする意欲をもたせる上で有効であった。
(4) 話合いのさせ方の工夫により、話合いがスムーズに行われた。話し合う際、何を話し合えばよいのかについて観点をはっきりさせたことや、「話し方の努力事項」（ポイント）を意識させて説明をさせたこと、「考えの足跡」（考えの過程）や既習内容の掲示が話合いに生かされ、ポイントがずれることなく、話合いの内容が深まっていた。
(5) ペアやグループで話し合う際、相手に分かるようにノートやワークシートを指し示しながら話したり、図をかいて説明したりするなど、説明の仕方に相手意識が見られるようになってきた。また、相手の話を聞いて、分かろうとする意欲に高まりが見られた。

７　研究の課題

(1) 教師の問い返しにはよく反応し、考えを深めるようになってきた。今後は、話合いの場で「子ども達同士での問い返し」を意識させることにより、練り合いの場における言語活動をより充実させ、対話を通した主体的で深い学びへつなげていく必要がある。
(2) グループ内での話合いはこれまでの経験の積み重ねによりできるようになってきているが、粘り強く自分の考えを伝え合うまでには至っていない。分かっている子だけが話合いを進めるのではなく、理解が不十分な子が、「あっ、わかった」と思えるようにすることが大切である。その素地を養うためにも、自然に聞き合ったり教え合ったりできる風土を醸成していくことが必要である。
(3) 課題提示の工夫や問いを引き出す問い返しは、学びに向かう意欲を引き出す上で効果が見られた。今後も児童が自ら解決したい、取り組んでみたいと思うような課題の提示や教師のはたらきかけの工夫を継続していくことが求められる。
(4) 児童の実態として、「はきはき話す」ことが苦手な子が多い。全体の場で、自分の意見を堂々と言える力はまだ付いていないように思われる。話したくなる状況を作る手立てや自信がない子への手立てを講じ、「話し方や聞き方」のスキルの日常的な指導を積み重ねていく必要がある。

（記入者　　時村　真弓）